一六」を見送つてみて、それがマザ〳〵と分る。

——確かに沈んでは行つた。然し「華かな」浮び辭と、沈んで行つて、さてその底で、しつかりした「岩」をオイそれとつかむ事が出來なかつたのだ。で、ひよい〳〵と水の面へ頭を出してしまふ事をしてしまつたのだ。鐵砲を水面に向けて、チイとにらんでゐる「彼奴等」に、それが見付らずにはゐない。

この市が（他の市もさうであるやうに）さうだつた。——看板を出してゐる「事務所」が役に立たなくなる。「彼奴等」の眼から秘密に移動して、幾つも持たなければならなくなつた。そのことは、それ等の分子を組合の大衆から「離れた形」にする。工場は「一ケ月に一人」しか動かない。——で、幹部だけが「浮き上つた」そして何時迄も逃げ廻つてゐる。コソコソ何かをやつてゐるんだ。彼奴等にはすぐさう見える。しかも「勞農同盟」は「黨」によつて指導されてゐると、日本語で明言してゐるではないか。——萬事がおあつらひ向きだ。——「四・一六」は來なければならなかつたのだ。この市の指導者は七羽完全に「ねらひ打ち」されてしまつた。（彼奴等の云ひ方に從へば）

大衆がなかつたから彈壓にもろかつた。

大衆の中に「沈入」してゐなかつた。

「繰りかへすな！」

で、大衆の實體を持つことだ。

サ、今度こそだ。

この市の底もムク〳〵とふくれ出すぞ。それが、見ろ、何時かハネ返へすから！　遲い歸へり、よく興奮が野口を捉へた。

八

黑い布を張つたやうに、晝でもその隅に闇が澱んでゐる。

急に鋭い男と女の、罵聲が、その二階の濱人足の室から殴ぐり合ふやうに起つた。ゆがんだボロ箱の「岩城ビル」は、と、一階も二階も三階もユサ〳〵と直接に、その身體の打ち合ひを傳えた。「岩城ビル」は大きな圖體を「イヤ〳〵」した。

「さ、殺せ！　殺せ——え！　殺せッ!!」

キリ〳〵と張り上げる聲が、障子をビーン、ビーンと、その度にならした。女房だ。

息をはづませた男の聲が折り重なつて、丸太棒のやうにそれに打ツつかる。どの室からも顏がのぞ

いた。

「又始まつた。」

障子の腹がグッ、グッと膨んで——と、腰を拂つて、殴ぐり合つてゐる二人が障子に乘つたまゝ廊下へ轉げ出た。皆廊下を馳けた。燒酎の空瓶が廊下を轉んで、階段のきざみを一つ、一つ音をたてゝ落ちて行つた。

雨が十日續いたのだ。そこへ濱口内閣が「×××」斷行の第一歩としての「××××」看板を表に持ち出した。港の仕事がガラリと滅つた。仕掛けてゐた仕事が取り止めになつた。市の「心臓」は狹心症發作におち入つたのだ。——明かに寡頭金融資本家の利益に追隨する「×××」の政策は、勞働階級に「火」の憤激を惹き起すだらう。それは、そして中小商工業の慘めな沒落と結びつく。——で、眞綿が必要だつたのだ。「××××」の手だ。それは巧妙に、×××の建直しといふ扮裝にすりかえられた。

——濱人足は十日仕事にあぶれたのだ。しかも、その十日の間人足も、その女房も、二人の子供も仕事がないのに、闇々しく「飯だけは食つてゐた」然しこれは本當でない。本當は、食えなかつたのだ。だが、食はなければならなかつたのだ。でどうなるか。

夫婦喧嘩になつた。夫は「働きのない馬鹿野郎」であり、女房は「生意氣にも、口だけツペコベ云ふ女郎」だつた。殴ぐり合つた。——だが、二人は喧嘩の相手を間違へてゐたのだ。

誰が本當の喧嘩の相手か。それは野口達が知つてゐた。

ビルの人に仲に入られると、人夫はプイと外へ出て行つた。女房は眞青な顏をして、手拭で頭をしばつた。眼が變に上づつてゐた。子供が側から「オ母ちやゝ！」と纏ひついてきても、うつろな顏をして拂ひもしなかつた。——女房も市役所の道路普しんやどうつきに雇はれてゐたのだ。

二日目の朝——夜明け「岩城ビル」の人達は劇しく表の戸をたゝかれた。水ぶくれにふくんだ女房と子供の三つの死體が戸板で運び込まれた。

野口が鼻をくぢらせた。

「死方を間違へた！」

九

「ソーニヤ」は寒い横顏を見せた。

「かうやつてゐるのと、どつちが幸福でせうねえ。」

女は投身した女房のことを云つてゐるのだ。

「私もうこんな生活イヤになつたの。——とつても、だから、あれ……」

「で、死ねるなら死んだ方がいゝ、さう思つてゐるんだな。」

「そ。」

「と、君と同じ外の矢張り不幸な人達は？」

「……！」

ソーニャはフイに顔を向けた。そして寺田を見つめた。寺田は、その西洋葡萄のやうなつぶらな、女の瞳のうちに、水のやうな深い悲しみを見た。——然し、悲しみを背負ひ過ぎてゐる。この女も亦「死方を間違ふかも知れない。」そのことを感じた。

「それなら、もつと居るよ。——丁度それと反對のだけど。」

野口がソーニャのことをきくといつた。

——同じ國から出てきた女が二人で、三階にゐる。「ゴム會社」に出てゐた。ゴムの白い粉が、モウ〳〵と立つ中で、一日中働くと身體がクラ〳〵した。咽喉が粉で粘土を喰つたやうにネト〳〵する。機械のそばに立ち盡した。歸らうと思つて表へ出ると、ア、アッと思ふ間に、向ひ側の大きな建物が

手前へ倒れてくる。——女は仲間の肩につかまつた。

「早く何んとかなりたい。」

野口は「ゴム會社」のなかに組織を作らうと思つてゐたのだ。で、彼は女達にそのことで近付いてゐた。

「何んとかつて、何に？」

「苦し過ぎるの。——で、ねえ、早く身體を抜きたいの。」

絹ちやんは監督さんと仲良くなりかけてゐるの、もう一人の女が彼女のことをさう云つてゐるので、それが「身を抜く」ことであるらしかつた。

「と、君と同じ外の仲間は？」——同じ問ひだ。

答は、然し「ソーニャ」の場合とちがつてゐた。

「でも、みんな一生ケン命働いて、偉くなるんでなくて？」

寺田も島田もがつかりしてしまつた。

「然し仲々悲觀するもんでないさ。」

野口が云つた。——野口は、絹と一緒にゐる女が「味方」であることを見てゐる。

「事情が最悪のところまで切迫して行く。今がさうだ。すると、そのドンづまりで、二つにハッキリ分れてくるんだ。」

十

野口は「生意氣」なことを云つてゐた。三月黨員の教育が重要だと云ふのだ。それはいゝ。——然し「仲々彼奴等には、その後の××の運動のマルクス主義的な轉換と社會情勢の變化が分らないのだ。惡いことは、分らうとしないのだ。——しやべつてゐるのを、ウン〳〵と聞いてゐる時は、分つてゐるやうだが、實際彼等がする仕事の端し〳〵や、言葉の尻に出る一つ、一つに爭はれず昔の辭がある。——勞農黨華かなりし頃の辭だ。解黨派の辭だ。それは、それは何んしろ、三月黨員の忘れることの出來ない搖籃だつたからな。尻にくッついて離れない筈だ。だが……」

「だが?」

「斷然、それは清算されなければならない。」

「三月黨員イデオロギーを清算せよ! か。だが、運動の先輩だからな、ちよつと……」

「このことでは、三・一五の先輩を高く買つてはならないし、警戒さへしなければならないのだ。——

——先輩としての尊敬とはハッキリ區別して考へなければならない。」

——生意氣な奴だ、島田は口に出して云ひたいところだつた。

「今は些細なことに見えるかも知れない、然し何か起つたらだ。その時は危い。」

新に生れ出やうとしてゐる組合は、幹部達の目論見を思ひ切り蹴とばした。「四・一六」直後のこの彈壓の下で、よくこれだけの勞働者が積極的に集つたものだ。幹部等はさう思つた。

——「三・一五」「四・一六」この二つが「土佐犬」のやうな前衛を勞働者の間から奪つて行つた。資本家は洗濯を始めた。今迄ギュッ、ギュッ云はされてきた資本家は「鬼のゐない間」の洗濯を始めたのだ。港の勞働者が嘗て「ゼネラル・ストライキ」で戰ひとつた條件は、復讐的に踏みにぢられて行つた。——だが、どうすることが出來たか?

組合の再建、それがこの時彼等の板のやうな胸をたゝいた。それは昔の響きを、彼等に思ひ起させた。で、彼等は藁をつかむやうに浮び上つてきた。「三月黨員」は見ろ! と、叫んだ。「さ、もう一度あの素晴しい闘爭を見せてやるぞ」

一年半近く「未決」に呻吟してゐたこの運動の先輩を、野口はこの時程恐怖を感じて見上げたことを知らない。

大工場はまだこの市では支配的な産業形態にはなつてゐないのだ。多分に封建的作業工程を持ち、碁石のやうに分散してゐる小工場や、港の運輸勞働者を一群れづつ、一群れづつ分立させてる「現場制度」が、その重な形態だつた。——だが、いや、だから何かあると、この勞働者達はすぐ動けるのだ。然し、忘れてならないことは、(三月黨員よ、忘れてならないことは)動いたあと、この勞働者達は又もとの散り〳〵に歸つてしまふといふことだ。——浮び上るのも早い。然し金槌程の彈壓が雜作なくそれを粉々にしてしまふ。

何故か？　主體が「工場」でないからだ。この地は且つて(舊勞農黨時代)左翼全盛の地と云はれた。このことが野口には面白く思ひ出せる。だが、あの大工場を擁してゐた隣りのS市が、何故「左翼全盛の地」たり得なかつたか？　しかも、レーニンが云つてゐる。「工場は我等の唯一つの城塞だ」と、こゝにあらゆる事がある。

「もう二の鍬ひは澤山だ。——勞働者が集まり易い、動き易いと云つて、工場に根のない、浮き上つた勞働者に宇頂天になつてゐられないんだ。

工場に手をつけることには最大な困難がある。だが、工場に(工場のみに)根を張れ！」

三月黨員は大衆の支持を受けてゐると、大喜びだ。然し「大衆」とは何んだらう、——マルクス主

義に大衆とは「工場勞働者」以外に何があつたか？——自由勞働者、貧民、小市民、貧農……雜多に一纏めにしてはならないのだ。

この彈壓の激しい時、——又益々激しくなつて行くとき、このことは嚴密に規定されなければならないのだ。何故なら、工場のみが如何な彈壓にも「地下に沈んで」耐え得るたつた一つの城塞だからだ。

三・一五以後、そして四・一六以後勞働者は今迄一つも自分達の「組合」を持たずにやつてきた。そこに勞働組合の再建の聲が擧つた。で、バタ〳〵と周章てたのだ。

「又俺達は同じところへ間違つて、引きづり込まれてるぞ」——集つてきた勞働者の顏を見て、野口はハッと思つた。「今が今でなくてもいゝ、五年かゝッてもいゝ、工場へ組織を進めるんだ、——これぢや三月黨員の清算どころぢやない。」

十一

「鹽ッ辛いミルク・チョコレートつて、たべてみたことある？」

ソーニヤは細い指先で銀紙をはがした。

「センチメンタルだな。」寺田がてれた。

「ゆうべのお客さんが殘して行つたの。——あたしがお客さんと一緒に、このチョコレートをしやぶりながら一緒に笑つて……ところが、喉の奥では鹽ッ辛い涙がチョコレートをとかしてゐるのを——考へてもみたことある？」

「……」

「オイ！」——障子がビシリと開いた。

野口の歪んだ大きな顏が覗いた。「いよ〳〵本當だよ。——提案が出たんだ。」

「さうか！」

パンフレットが膝元に飛んできた。「新黨樹立について提案す。」

「大山郁夫の裏切りは本物だ。とう〳〵脫落してしまつた。——工場の中にゐない奴には、矢張り××が分らないんだ。——活字の字面だけで覺えてゐるんだらう。」

寺田は、野口の言葉に本當に「運動」してゐるものだけが持つ、深い痛手を感じた。

「それに河上肇も賛成ださうだ。」

「河上も！　あの——」

「運動が華かな時は、誰だつて尻馬に乘つてくる。——一體、今迄無產者解放運動といふ定義がハッキリしてゐなかつたんだ。自分の身體と名前を社會的に隱して、工場の中に仲間を一ケ月に一人、二ケ月に二人と見付ける。このジミな仕事が無產者解放運動なんだ。これ以外にある筈がないのに、今迄の日本の運動の官許的變態さから、どんな時でも、どんな處ででも、すぐ演壇にかけ上つて、我等の同志よ、奮ひ起て、とか、我等の行くべき處は戰場であり、墓場であるとか、大きな見得をきり、やんやと云はれ、そしてデモだ、デモだと景氣よく騷ぐ。それが運動だと思はれてきたのだ。

ロシアにこんな事がある。地下室で非合法のプリントを刷つてゐるある同志は、それをばかり四年も五年も六年も續けたのだ。彼はそしてその刷つたものを地下室の出口まで持つて行けばいゝ。出口には又別な同志がそれを上の出口まで持つて行く、——それを續けたのだ。六年目か七年目にその地下室の同志が出口迄プリントを持つて行きながら「同志よ、我が黨の情勢はどうなつてゐるのだ」ときいた。出口の同志は云つた。

「俺にも分らない。——俺の大きな任務は、この黨の生命とも云ふべきプリントを出口まで運ぶことだ。そして俺はそれを七年、一つの手落ちなく運んでゐる。それしか俺には分らない。そしてそれでいゝ。」

もう俺達の運動形態もこゝまで來てゐる。これが俺達の運動の唯一つの形態なのだ。——大山にこのプリント運びになる覺悟があるか、ときゝたいんだ。」

興奮は野口の顏を蒼くした。

「で、さうだとすれば、そのことのためにはもう、俺達にはモノを覺えてゐる學者や名士や演說をしたがる、名を賣りたがるプロフエッサーなど——早大敎授や、帝大敎授や、法學博士や、辯護士など要らなくなつてくるんだ。」

「さうだな。」

「無產運動に於ける名士を淸算せよ、だ。」

寺田にも、益々運動が「工場勞働者」だけに限られてきたことが分つた。最後迄殘り、そして敵階級と最後迄決定的に鬪ひ得るものは、やつぱり工場勞働者だけだ。

「俺達は昨日の委員長と無慈悲に手を切らう！」

十二

「どんづまりへ行くと、こゝでも矢張り二つに分れるんだ。——三・一五や四・一六でプロレタリア

の指導力が弱まつた。だから、それによつて指導されてゐる鬪爭團である勞農同盟の力が弱まり、刻々の問題を活潑に取り上げて行けなかつたことは事實だ。だから、——このだから二つに分れる。一つは、だからこそ尙更プロレタリアの黨の再建强化に努力しなければならない。他は、だからこの場合別に官許政黨を作らうといふのだ。が、どの時代、どの國の場合を問はず、無產階級の解放はプロレタリアの黨——×××なくして行はれたことは「斷然」無いのだ。客觀的狀勢の如何によつて、あつてみたり、無くてみたりする、そんな手品みたいなものでないのだ。マルクスとレーニンを讀んで、この事を疑ふものは一人もゐまい。とすれば、どつちが正しく。どつちの方向へ努力することが正しいか、分りきつたことだ。

それア遣りづらい、困難な仕事だ。一生の間誰れにも知られず、コツ〳〵やつて行かなければならない仕事だ。或ひは一生の間獄舍で、呻吟しなければならなくなるかも、知れない仕事だ。——だが。これだけしか道がなくこれだけしか、正しい道がないとすれば、俺達はそこへ進んで行かなければならないではないか。」

寺田は野口の云ふのを聞いてゐるうちに、だん〳〵今迄ハツキリしてゐなかつたことが、分つてくるのを覺えた。彼の屬してゐた、左翼藝術團體は敢然と「大山派の裏切」に抗爭した。その事があつ

てから、その雜誌の讀者がだん〳〵尻込みをし始めた。何かやらうとしても、ちつとも集りがきかなくなつた、寺田がそのことを野口にこぼした時、野口は、

「それはどんな奴だ。」ときいた。「雜多な要素をゴタ〳〵と集めて、それでプロレタリア藝術の大衆化が出來たと思つてゐた今迄の誤りを、この際捨てゝしまふことだ。——この困難な情勢はそいつ等を野糞のやうに振り落して行くだらう。困難な情勢になつて、始めて誰が敵か、誰が味方顏をしてゐたかそして誰が本當の味方だつたか分るのだ。——十人が二人になつても心配しなくてもいゝ。その二人が工場勞働者であれば！」

野口は又組合で、ある交通勞働者にきかれた。

「勞農同盟の意見は工場にしか當てはまらないではないか。」

「さうだ。唯一つの城塞は工場だ。」

「この市では、然し工場の勞働者は日雇のビイ〳〵な俺達とちがつて、羨ましい程有難い生活をしてゐる。——俺達の方を先きに何んとかして貰ひたいんだ。」——この勞働者は嘘を云つてゐない。——大山等の意見が地方や農村のある層を動かす理由は、この雜多要素の雜多な狩り集めにあるのだ。こゝに危險な魅力があるんだ。——貧乏人だからプロレタリアではないのだ。何がブルジョアと

眞實に對立するか、資本主義の生み落した（先妻の子やその兄妹ではなしに）——眞實の生みの子である。純粹に基本的な階級は何か、かう問題をたてなければならないのだ。

「それは工場勞働者だ。」

十三

この×のブルジョワ與黨は野黨より議員數か少なかつた。このことは絶對專制力の巢喰つてゐる樞密院が政友會に總辭職をせまつたことから起つた。「議會政治」がその本質でなければならない。ブルジョワ×として、これは不可思議極まることだ。そこに何かなければならなかつた。

野口は考へてゐる。——戰爭が近づいてゐる。そして勞働階級はその貧窮化から益々××的に擡頭してきてゐる。そんな場合、露骨に反動を表に出した××では都合惡くなつてきたのだ。英國の「勞働黨內閣」が何故登場してきたか、勞働者の味方らしい扮裝が、絶對に必要になつてきたところからきてゐる。「議會政治」であるにも不拘（彼等の謂ふところの民意にも問はず）サーベル內閣を辭職させて、自由主義の裝飾をした、民政黨に代らせたのも同じところから來てゐる。この橋渡しをしたのは、その頃「××××ばされた」×國の何んとかKKなのだ。たゞ「御××××」に遙々×國から

部がワザ〳〵來るものか。分りきつてゐる。

軍縮會議は「武器を捨てる」會議（戰爭をやめる會議）でなくて「お前の武器」と「俺の武器」との長さだけを問題にする。然しその効果としては、戰爭から一番慘酷な負擔を受ける勞働階級に、このやうに戰爭などは仲々起きないものだといふ錯覺を與へる。（だが見よ、H・S製鋼所ではこの不景氣時に一千人の職工が、二千人に殖えてゐるではないか、誰でもが知つてゐる。）

又彼等は情勢が切迫してくればくる程、右翼左翼の社會民主々義者を表からも「こッそり裏から」も優遇する。それは勞働者の味方らしく、一番勞働階級に思はれる特色を持つてゐたから。――日本の大山郁夫はこの世界的潮流に乘つた。この委員長はかくして勞働階級を、その前衛と共にブルジョワに賣つてしまつた。賣つた？　ハツキリ賣つた！

今まで彼奴等の眼から自由であり得た同志は、大山の裏切りから「ねらひ打ち」にあらされ出した。「新黨樹立」に反對するものは「×××員」か「その支持者」でなければならないではないか。――アレと、アレと、アレが×××者ですよ、グルになつた郁夫がスパイに對して「密告」をした黨員を賣つたのだ。

三階の窓から、動きの早い都會か斜め四角に區切られて、見え、消える。その中に、フト窓を見上

けてゐる「眼」を見付けると、玉枝は急いで、野口の室にかけ込んだ。

「變な奴が下に……！」

「分つてる。――どうやら、かうしばらく會えなくなりさうだな……」

玉枝は何か胸に來た。

「さう。……お互に非合法は非合法ねえ。あたし×××××と、その夜は朝まで、×××員のやうな氣持でウツラ〳〵するの。」

野口は大きな聲を出して笑ひ出して。「×××員はよかつた！」

何故この人はこんなに大きく笑えるのだらう。

十四

石の階段を登ると、夜の市が、一眼に見える。その山は市の眞中にあつた。絹は監督に手をひかれて、一段々々登つて行つた。息切れがした。ゴムの粉で肺が弱つてゐるかも知れない。上から下りて來る人とすれ違ふと、ジロ〳〵見られた。絹は赤くなつた。だが嬉しかつた。水色にペンキを塗つたベンチが頂上にあつた。それに腰を下すと、ヒンヤリした。絹はハンカチで口を抑へた。

夜のこの市を、こゝから見下すのは、女には始めてだつた。色々な起伏のうねりを見せて、電燈が大海原のやうに擴がつてゐる。碇泊してゐる船の赤や青の電燈は、暗い海に尾をひいて映つてゐた。

「まア！」絹は輕く聲をあげた。

男の柔い、小さい手が絹の膝の上を遊んで——絹の手をもとめた。船でならしてゐる銅羅が、町の家並の上を越えて、直接に、この山に聞えてくる。——絹は胸が知らずに、うつとりするのを覺えた……。

別れる時、若い監督は「又ねえ。」と云つた。それから別なことのやうな調子で附け加へた。

「工場の中もこの頃物騷になつてきた。——惡い考へが女工の間にさへ入つてきてゐる。僕から社長に頼んであるけれども、お絹ちやんにその方のことをよく調らべて貰はうと思つてゐるのだけれど……」

監督は「社長」と緣續きだ。絹は男のことでは、何よりこの事を一番先きに知つてゐた。それは絹には大切なことだ。

「貴方のためですもの！」

「有難う。」

「まあ、有難うなんて……！」

「あ、惡かつた。」

別れる處へ來てゐた。兩側に高い樹が並んでゐて、道は暗かつた。絹は立ち止まつた。身體を固くして男を待つた。

一人になると、絹は急に疲れてゐた。ぐつたりした。然し幸福な感じが底から、底から彼女の心臟をくすぐらせた。彼女は重い乳房を押えて、明るいショウ・ウインドウに寄つた。

「岩城ビル」に歸る迄、絹は唇の上に×××の匂ひのかすかな餘韻を樂しんでゐた。

「ゐる？」

開けると、何處へも出なかつたお惠が薄い本をパタリと机の上に伏せて、振りかへつた。それからその本を急いで、膝の下にした。

十五

人は長い影を斜めにひいた。それが重り合つて、延びた街は雜沓してゐた。丁度退け時なのだ。

「然し矢張り考へるな。後から後からと拔かれて行く。これぢやまるで、素手で、彼奴等の世界一だ

と誇つてゐる完備した網に引つかゝりに行くやうなものだ。」島田だ――「俺は何も××××に反對ではないのだ。だが、彼奴等からもう少し見付からずに、ぢツくり仕事が出來るやうにならないか、と思ふんだ。」

島田はこんな事を云ひ出してゐた。野口はだまつてゐた。――勞働者のくせに寺田にも劣る！

「組合に來てゐる勞働者が――港の勞働者だけれども――云つてる。ストライキを起して、親方を毆ぐりつけたり、スパイをはふり出して警察に引ッ張られるんなら、堂々とやつてみせるッて云つてるんだ。が、何もしないで、まアちよんぴり位やつて、すぐ×××員だからつて、三年も四年もやられたら、たまらない。それさへなかつたらドシ〳〵やるッて……それが一人や二人でないのだ。」

露骨に不機嫌な言葉が、野口の口を出た。

「第一に、この運動はネフスキー街でないッてこと。第二に、伊達に先輩が一生を棒に振らなかつたといふこと。――で、縮めて云へば、前者の轍を踏むべからず。斷然やり通すこと、これだけだ」

――それッ切り默つてしまつた。お前も野糞になりたいのか！

ラヂオ店の前では、赤く枠をとつた張紙が人を集めてゐた。

「小川前鐵道大臣、遂に收監！」

その文句は群集の肩を搖すぶつた。ハネ返へす肩がある。政友會支持者だ。

今、議員數の少ない民政黨は且つてないシンラツさをもつて、政友會に續け樣の當身を喰らはしてゐた。解散は次の議會では免がれない。民政黨はそして勝たなければならない。で、政友會のアラを「大ゲサ」にえぐり出すことが必要なのだ。「買動事件」では前賞動局長がフロックの上に網笠をかぶさせられた、動三等を金で買つた政友會系のブルジョワは珠數つなぎに刑務所にひかれた。「私鐵買收事件」では大臣！　がひかれたのだ。それは政友會の副總理が。まだある。「山林拂下事件」何々、それから何々……。

「いよ〳〵民政黨のものだ。」

さうだ。だが待て。――これは單純に、片方が片方をやッつける、それだけの事ではない。さう見ては、本當のことに觸れないのだ。ブルジョワは今迄、ブルジョワ自體中の對立と或ひは矛盾から、その頭部としては一つでなければならない政黨を二つ、或ひは三つ持つてゐた。それは或る時は交代することによつて「人民」に××××な信頼をつながせる効果をもつた。――然し資本主義が帝國主義の段階に入り、獨占の形態に入ると共に、併立してゐるブルジョワ內に單純化が起る。金融寡頭支配だ。と、それと一緒に、プロレタリアが「決定的」に「純粹」に對立してくる。――この二つの過

程は、對立してゐたかの如く見えたブルジョワの黨の相互の相違を抹消する。そして一體となつた力で、これも亦「ハツキリ」と「決然」と、プロレタリアの黨——即ち×××これ（以外に彼等が「ハツキリ」と「決然」と對立する黨はない。まだあると考へるのは大山と山川しか居ない。）と對立してくる。

英國ではどうか？　自由黨と保守黨は已に、已に對立の根據と必要を失なつて、手を握り合つてゐる。——××も、××らしい色々な特殊の「摩擦」を伴ひながら、今その「過程」を、ふんでゐるのだ。——かう見なければならないのだ。

「で、俺達への彈壓は二乘されてくるわけだ。表面の假面はこゝでは問題ではない。濱口に望をつなぐ大山に何が分る。——誰が正しいか、もう少し待て。」

大山郁夫　山川均

十六

「ド・スヴイダアニヤ。」

コンクリートのタ、キに椅子をずらして、客が立ち上つた。

ロシアの女は、

「サヨウナラ……マタ！」

あやふやに云つて、膝だけをひよいと曲げた。

客が出てゆくと、野口と學生だけになつた。「カフエー・シベリア」のレツテルを貼つた小さいマツチが、學生の指先きで、色々に向きをかへる。野口の鏑釘のやうにポツリ、ポツリ云ふのをきいてゐるのだ。

「その四・一六の同志の××を見ると、そのことがハツキリ云はれてゐる。——中央からのオルガナイザーはその同志に云つたさうだ。この市には理論的にハツキリした、又實際運動にも色々な指導を與へてゐるインチリゲンチヤが澤山ゐる。その中からは、今迄秀れた同志をも出してゐる。然しこの方面への黨員獲得は第十義にまで下げてしまはなければならない。學生もその内に入つてゐる。

君は、俺達と一緒にゐるあの相當知られてゐる左翼藝術家の寺田や、君等研究會のなかに一人も黨員がゐなくて、意外に、君等から云はせればマルクスの「マ」の字も知らないやうな職工の中から出たりして、吃驚したらう。もつとも四・一六にはインテリは一人ゐた。處がその理由がまた面白いのだ。それを黨員にしたのは、色々な文書の仕事や連絡には、勞働者では目について都合が惡いから、それだけの便宜のためだといふのだ。——そして、この方向は正しいのだ。」

これは學生の胸に恐ろしくこたへる。

「だが、このことの意味は、方向がますます、具體的にハッキリ正しく。工場に向つてきたといふことだ。工場に直接、間接に關はりのあるもの、かうなつてきた。

そして、この基本的な方向の決定は同時に今迄過重評價されてきたインテリ、學生の方向を清算的に再決定することになるわけだ。——單純な、それ等の否定では無論ないが、君も知つてゐる通り、三・一五で入つた同志のうち、インテリ出身のものが、どんな裏切りをしてゐるか。解黨派を稱へたり、愛國社會主義に逆轉して保釋になつたり。そんな連中はみんなインテリなんだぜ。——大きな過渡期だ、どんな方面でも。」

學生は考へ込んでしまつた。で、野口は話をかへた。

「カッフェー・シベリア」の女は離れた椅子でハルビンから出てゐる白系の機關紙「ザアリヤー」を讀んでゐる。——この市の勞農領事はこれ等の在留白系ロシア人を詳細に調査して、本國に通知してゐた。二人は何處かゝらきいてきたその事を話した。今の自分達と、それが丁度逆なことが面白かつた。二人は大きな聲で笑つた。——露支國交斷絶の時、「カッフェー・シベリア」の一番目の息子はハ

ルビンに馳けつけた。それは知られてゐる。

「一寸新聞を見せて」——學生が云つた。

戰爭の寫眞が並んでゐる。

「これは何に?」

ロシアの女は兩手を握り合せて、肩を大ゲサに振つた。「お——お、これ、ボルシエヴィキー殺された、殺されたとこ支那兵に?」

學生が說明した。「ロシア人の一番嬉しい時にする表現があれなんだ!」

十七

雨が續いた。すると秋が來た。岩壁に這ひ出てゐる入換線の貨車が、奥地から青豌豆、小手亡、大納豆、大豆を運んできた。——港はアルコールにありつけたのだ。心臟がときめき出した。積取りから歸つた朝鮮人が、ダブ〳〵の汚れたズボンをはいたまゝ、口を開けて居睡りすることが要らなくなつた。晝のうち室が空いた。それはめづらしかつた。

ソーニヤは窓に身體を寄せた。「私ねえ——」思ひ出したのだ。然しそれッ切り眼をヂッとすえて

しまつた。

女は前の日、新らしく移つてきた食料品店に「コンビーフ」を買ひに行つた。そして、その主人が且つて自分のところへ來たことのあるお客であることを知つてしまつた。男はもう妻を持つてゐた。若くて美しい。で、男はソーニャを棒泥猫をにらむ時のけはしい眼でにらんだのだ。——女はそれを云はうとして止めたのだ。

三日して、ソーニャは寺田のところへ來た。半分障子を開けて、そこへ立つて、——然し入いつて來ない。

「どうした?」

「お別れだワ……?」

その日になつた。下へ荷車が來た。下から聲を張り上げて呼んでゐる。で、行かなければならない。風呂敷包みを一つ持つたソーニャが、三階の自分の室を出た。——奥地の炭鑛のある街に行くのだ。寺田と玉枝はだまつて後から降りた。細い急な、ギシ〳〵なる階段だつた。——降りつくと、便利屋が表に立つてゐた。一寸頭を下げた。それから横を向いて「手鼻」をかんだ。

「どう?——風呂敷包み一つだけ持つて流れて行くなど、×××と同じね。——淋しいワ!」そして

寺田に背を見せた。

便利屋の車が、びつこなきしみをたてた。ソーニャがその後をほつそり出て行つた。——玉枝が聲をたてずに泣いてゐた。

寺田は段々を二つ置きにとんで、二階にかけ上がつた。——二階の窓が開いた。上を向いてゐる。(矢張り!)ソーニャの顔が瞬間だけほゝえんで——それが歪んだ。女は角を曲つて、そして行つてしまつた。

十八

「白蟻」が決議された。新しく出來上つた組合は、新黨支持に動いてしまつた。それは有力な幹部の退却と、遅れてゐる運輸労働者への追隨によつてまんまと持つて行かれてしまつた。

「これこそ、組合が工場労働者によつて、ヘゲモニーを握られてゐない大證據だ」——野口は口惜しい!

中に入らう、フラクションだ!——で「白蟻」が決議されたのだ。

形から云つて、野口達は組合から離れてしまつた。——「野口は口では偉いことを云つてゐるが、

創立準備會に出たばかりで、ちつとも組合の仕事もしてゐないんでないか」——組合の幹部が云つた。

野口はそれに答へられたか。——答へろ、さう云はれてゐるのは、然し野口ばかりではないのだ。合法主義者は「組合協議會」や「勞農同盟」に對して、何をやつてゐるか答へてみろ、と云つてゐる。——街頭へ出たか、演說をしたか、ビラを撒いたか？

方向が違ふのだ。そして「地下に沈んで」ゐる仕事を表へ出せ、といふのか？——×××××がそれと同じことを云ひはしなかつたか。そして又、それをハイと云つて答へた奴を「スパイになりやがつた！」と云ひはしなかつたか。——ところが、さうぢやない。犬になつた大山等は、答へられないといふことを知つてゐて、答へろ、答へろ、と云ふのだ。そして「どうだ答へられないだらう！」と。

野口は「危く」なつた。然し彼はその前に「H・S製鋼所」に後を作つて置かなければならない。

●新聞が、警官の「×××行賞」を報じた。その日の夕刊に「かうなれば××黨さんだ。——××の神様！」——××が金袋をもつて、ナツバ服にペコ〳〵してゐる漫畫が出た。——××一同感激

して、益々職務に奮鬪することを誓つた。

●「大山氏等の新黨組織許可の內定。——思想善導に稗益するところあり、といふ見解のもとに」

●島田はそれを見ると、顰をゆがめた。彼は「提案」を讀んでから、アヤフヤになり出してゐたのだ。

●ゴム工場では、女工の誰かゞコツソリ云つたことが、そのまゝ監督に洩れた。絹は除けものにされ出した。それに、監督にいゝ加減おもちやにされてゐるのだ、そんな噂さが立つた。——お惠は三、四日置き位に、野口からパンフレットを借りて行つた。

●寺田は野口と一緒に「孤軍奮鬪」を續ける覺悟をしてゐた。「我等の行くところは戰場であり、墓場である。」といふのは、大山等には勿體ない。これはそのまゝ「俺達の行手」ではないかと云つた。

●玉枝は時々野口に一、二圓置いて行つた。「何か仕事に使つて。」——女は今の生活を、野口達の仕事に役立たせたかつたのだ。

——秋が深くなつた。暴風雨の多くなる時だつた。「ビル」の朝鮮人は又口を開けて居睡りをした。

十九

野口は波止場を歩いてゐた。港のなかゞ波立つてゐた。荷役が出來ず、波止場はさびれてゐた。暗い水の色が寒々と騒いでゐた。——紙屑と林檎の皮が吹き飛ばされてゐた。

波止場を歩いてゐると、人間は小さかつた。赤い腹をムキ出しにしてゐる汽船は見上げるやうに大きかつた。——税關の見張所には、高々と、赤い旗が風の向きを示してなびいてゐた。「暴風警戒報」だ。

野口は歩いて行つた保税倉庫のところから、房つて來た。——ある特定の目印をもつた男と會ふためだ。その男は、東京から來るのだ。——「×は又立ち上つた」のだ！

大山等の「結黨大會」が近付いてゐた。且つて、その會場は「顎紐」によつて、「踏み」にぢられた。然し今やその會場は彼奴等によつて「保護」されやうとしてゐた。「勞働同盟」の闘士は、彼等が且つてこの×のある大きな××のある前に豫備××を食つたと同じやうに、續々と、その大會を安全に終了させるために××されてゐた。

二十

——秋が深くなつた。暴風雨の多くなる時だ。

（一九二九・一一・三）

工場細胞完

工場細胞

不復
許製

昭和五年七月[illegible]五日印刷
昭和五年七月[illegible]八日發行
定價50錢

日本プロレタリア作家叢書第十篇
工場細胞

著者 小林多喜二

發行兼印刷人 山田清三郎
東京市麹町區有樂町一ノ四

東京市麹町區内幸町一ノ六
發行所 戰旗社
振替東京一〇三二六番
電話銀座五二三番

ユニオン社印刷所印刷
東京市外高田町三[illegible]七

ストライキ戦略戦術

戰旗社版

經濟闘爭と共産黨の任務

同志テールマンの報告
同志ロゾフスキーの報告
同志テールマンの結語
同志ロゾフスキーの結語
附錄　右の報告に基づいて採用された決議

勞・資兩階級對立の狀勢は最後の危機をはらんでゐる。ストライキの嵐は暴れる。コミンテルンのストライキ戰略戰術こそは、ストライキ闘爭の最高指導標だ！

六月下旬發賣・直接申込め!!

「インタナショナル」編輯部編譯　☆定價壹圓　送料六錢

發行所
東京市麹町區内幸町一ノ六第一商興ビル
振替口座・東京一〇三二六番
戰旗社

蕃ソリータス

トーエケ・ソ 熱烈の家庭

五月下旬發賣　☆　定價五〇錢
直接申込め!!　四六版一六〇頁送料四錢

戰旗社版

ソヴエート同盟は國外國内の反ソヴエート的資本主義的分子との尖鋭なる闘爭を通じて社會主義建設と文化革命とを進めてゐる

内容
一、ソヴエート現下の經濟狀勢と右傾的危險に對する闘爭
二、偉大なる變革の年
三、農業に於ける社會主義の展開
四、ソヴエート大學生との問答
五、成功から來る驕慢
附錄　理論家スターリン　アドラツキー

茂木林唯士訳

スターリンこそはレーニンの意志と理論を信奉して、この闘爭の綱鐵の指導者だ。現在まで一ケ年半の重要論文のすべてはここに集められた。

東京市麹町區有樂町一ノ四　振替口座東京一〇三二六番　戰旗社

全婦人勞働者姉妹諸君！

諸君の革命的解放のために闘へ

婦人問題

戰旗社版

壓迫と迫害と搾取をはねのけて、婦人の革命的解放は、プロレタリア革命なくしてはあり得ない。こゝに婦人解放闘爭の正しき指導を、諸君の闘爭のために捧ぐ。

主要内容

一八三〇年の國際婦人デー（クルスプカヤ・セイロワ）

現段階婦人運動の現勢

社會主義運動と婦人

帝國主義戰爭と婦人

婦人とセクプル

「インタナショナル」編輯部編譯

定價五〇錢 送料四錢

發行所 東京市麹町區内幸町一ノ六 第一商興ビルヂング二階 振替口座・東京・一〇三〇一・六二三

戰旗社

戦旗社版

50セン

598
30

終